

10

「千住の鷗外碑」建立される

木村 繁

東京都

鷗外森林太郎の碑は、主にその居住地ごとに建立されている。この度、碑のなかった東京都足立区千住にも『千住の鷗外碑』と題した碑が建った。すでに区内には、大正5年に建立された鷗外撰文の『大正記念道碑』がある。鷗外は父静男が千住に住んでいた誼みから撰文したが、鷗外文学中に千住を扱った作品が少なく、また撰文であるために、これまであまり注目されなかった。

演者は平成6年以来、千住に鷗外文学碑の建立を提唱してきた。平成20年の足立史談会40周年記念事業として建碑が計画され、足立区医師会、足立史談会、町会等によって「森鷗外文学碑を建立する会」が結成された。かくして平成20年5月10日、足立まちづくりトラストの資金援助と区民の醸金により、千住の鷗外旧居跡に建碑された経緯を述べた。

鷗外とその父静男は、足立区の著名な医人である。静男は津和野の旧藩主の侍医として、明治5年津和野から上京して向島に住み、明治12年千住宿区医となった。ついで明治14年から千住に転居して南足立郡郡医となって活躍し、また橋井堂医院を開き盛業であった。旧居は千住1丁目19番地（現千住1丁目30番8号）の現足立都税事務所の敷地である。鷗外は当時東大医学生で寄宿舎や下宿住いであったが、明治14年夏の卒業近くに千住の実家に戻り、進路の決まらぬまま父の診療の手伝いをしていた。12月に陸軍軍医副（中尉相当）として陸軍省医務局に出仕し、明治16年ドイツに4年間留学した。帰国後ドイツ女性来日という事件もあり、明治22年結婚のため根岸に転居した。

都税事務所の生垣に建てられた碑石は、甲州小松石を使用し、高さ75cm、幅125cm、台座の高さ35cm、幅160cmの大きさである。碑文の撰定に当たり、演者は、小説『カズイスタカ』の一節を推薦した。それは、

「翁は病人を見てゐる間は、全幅の精神を以て病人をみてゐる。そしてその病人が軽からうが、重からうが、鼻風だらうが必死の病だらうが、同じ態度でこれに対してゐる。……父の平生を考へて見ると、自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行くのに反して、父は詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐるといふことに気が附いた。宿場の医者たるに安じてゐる父の resignation レジニアションの態度が、有道者の面目に近いといふことが、^{おほろび}臍気ながら見えて来た。そして其時から遽に父を尊敬する念を生じた。」という一節である。

小説『カズイスタカ』は明治44年2月号の『三田文学』に発表された作品で、鷗外が生涯を回顧し、青年期の千住時代の父と千住について執筆したものである。鷗外は、熊沢蕃山の日常些事も大切であるという考えに共感し、千住時代の父の背をみて過ごしたことから「諦念」について執筆したのであった。代診時代の臨床経験を「カズイスタカ」と題して、下顎脱臼を「落架風」、破傷風を「一枚板」、妊娠を「生理的腫瘍」の3症例に、分り易い名を付して小説とした作品である。

この小説に続いて発表した『妄想』を碑文にした千葉県大原の文学碑とともに、本碑は生涯を回想した碑文であり、佐倉順天堂に遊学した父の診療を明治初期の古い医学と非難しながらも、父の治療態度を尊敬するという文章は、医史的にも価値がある。鷗外の自宅図面と衛生学的著述や弟妹の千住についての描写は、千住の当時の生活描写に優れ町おこし運動を進める千住にとって文学碑以上に有意義で、千住を強調した碑名となった。